

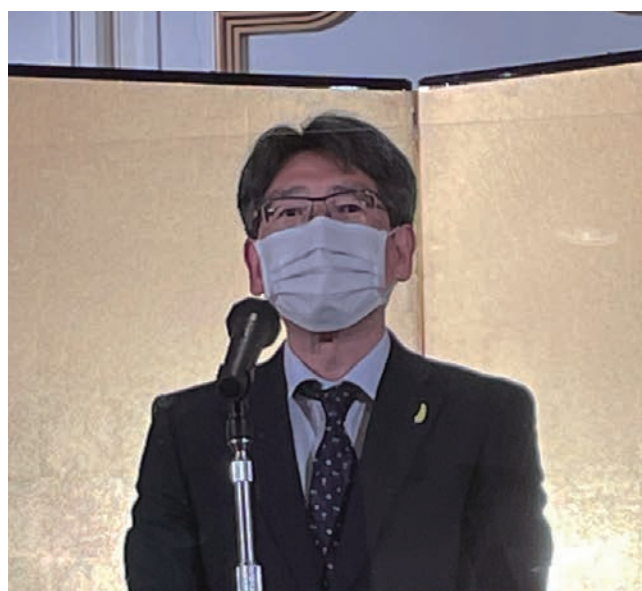
更生保護法人広島県更生保護協会 感謝状伝達・贈呈式並びに助成金交付式及び講演会

日時：令和4年8月2日
場所：ホテルセンチュリー21広島



更生保護法人広島県更生保護協会
松藤研介理事長

更生保護法人広島県更生保護協会感謝状伝達・贈呈式並びに助成金交付式及び講演会が8月2日ホテルセンチュリー21広島において開催されました。更生保護法人広島県更生保護協会松藤研介理事長の挨拶に続き、広島保護観察所山田浩司所長が挨拶されました。



広島保護観察所 山田浩司所長

法務大臣感謝状

一般財団法人多山報恩会 様
(株)共和保険サービス 様
広島県遊技業協同組合 様

中国地方更生保護委員会委員長感謝状

明和運送(株) 様
広島市信用組合 様

※なお各感謝状伝達・贈呈のご芳名は当日出席された方のみ掲載させていただきました。



法務大臣感謝状のほか各種感謝状伝達・贈呈が行われたのち、助成金交付式が行われました。その後、更生保護法人ウイズ広島山田勘一理事長による講話がありました。



助成金交付式

広島保護観察所所長感謝状

特定非営利活動法人
環境保全創生委員会 様
有限会社安芸興産 様

広島県更生保護協会理事長感謝状

(株)オガワ 様
久保弘睦 様
(株)たびまちゲート広島 様
広島エフエム放送(株) 様
ひろしま管財(株) 様
(株)古昌 様
三島食品(株) 様
中地区保護司会 様
安佐南地区保護司会 様
廿日市地区保護司会 様
大竹地区保護司会 様
尾道地区保護司会 様



更生保護法人ウイズ広島
山田勘一理事長

思春期の子どもとの対話の難しさ

元中学校校長 和田 晋 氏



私が公立中学校に勤務しているところに、多くの保護司の皆様を支えられるなかで学校運営ができたことについて感謝の意を述べました（「更生保護ひろしま」第774号、令和3年6月1日発行、2-6頁参照）。今も当時を思い出すたびに保護司の皆様には心からありがたく思う感謝の気持ちでいっぱいになります。

当時、保護司の皆さんは、しばしば学校を訪問してくださり、子どもたちの様子や実態について守秘義務の中で率直に相談していただきました。子どもに共感しながらも支援の具体的な手立てについて相談いただく熱心な姿に心から感謝し、子どもの真の更生を目指した幅広い情報共有などの連携に頭が下がる思いでした。

思春期の子どもたち、なかにはその保護者を含めた「ウソ」に苦悩され相談されることがよくありました。保護司の方々だけでなく、教職員も子どもが発する言葉でぶつかり合い、その後の関係づくりがうまくいかなくなる事例はたくさんありました。こちらに余裕がなく、子どもや保護者への共感や寛容の心を忘れたアプローチは間違いなく失敗しました。

保護司の皆様と繰り返し話し合った子どもたちは、その行動や言葉の理解に苦しみ苦悩することが多くありました。特に思春期にある子どもたちは本心と裏腹の言動も多く、その表面的な「ウソ」に振り回されることも多くありました。

今回は私自身が体験した具体的な事例から、思春期の子どもとの対話の難しさと関係づくりの方法を考えてみたいと思います。

私の教員生活でどうしても忘れられない中学1年生女子、涼子（仮名）がいます。彼女は遠く離れた学区から母親の再婚と転居にともなって中学1年中途に転校してきました。小柄でおとなしそうに見えますが、校内・深夜徘徊、暴力、低学力……何よりも高いストレスから吐き出される他者への激しい暴言に関係がつくれず苦悩していました。

「近づくな、死ね」「声かけんな、関係ない」……他者の関わりを一切拒否します。関わりがもてず徘徊し続ける涼子をどうしようもなく、教職員が意気消沈する学校状況でした。

私と担任は展望が持てないなか、涼子への関わり方についてスクールカウンセラーに率直に相談しました。カウンセラーは笑顔でまったく真逆の涼子の内心を教えてくださいました。涼子は罵声を浴びせる先生方も学校も大好きですよ。だからこそ毎日登校するんですよと。私はすぐに学校全体の研修会を急遽開催して、全教職員で守秘義務の中、情報共有しました。

涼子は、父親と生別したばかりで、母親が再婚した若い父親になじめず、家庭に涼子の心の居場所がなく、食事也十分に取れない状況にありました。

涼子は毎日学校に行くことだけが楽しく、親しい友だちはいなくとも、お父さんやお母さん、お兄さんやお姉さんに思える先生方に甘えたくて仕方がなかったのです。うまく人間関係が築けず、自分に着目してもらふ術は暴力や激しい罵声などの言葉にならざるを得なかったなど、スクールカウンセラーからの話から私たちは涼子の本心や本音を理解できました。



涼子にとって学校は唯一の安心できて救われる場所であったのです。転居したばかりの自宅に涼子は馴染めず、新しい若い父親と素直に話が出来ず、母親からは怒られ続ける涼子。彼女にとって学校だけが自分の思いや気持ちをストレートに表す居場所であり、誰にも気兼ねせずに安心して給食を味わうことができる場所だったのです。これまで理解できなかった涼子のこれまでのことや背景、スクールカウンセラーにだけ話していた本心を聞いて、教職員たちは涼子をいとおしく思い、彼女に共感できました。

その研修会以降、涼子への教職員の関わり方は変わります。彼女の表面的な言葉や表情に感情的にならずに笑顔で彼女を受け止め続けることを皆で確認したからです。居場所が見つからず心の本拠地を探して徘徊する涼子。表面的な言葉は「ウソ」であり、涼子はひたすら学校や大人に助けを求めているように思います。「私をレッテルはって見ないで」、「あんたを頼りにしている」、「私を見捨てないで」「ここだけが私の居場所なの」と。

虐待と言ってよいほどの苦痛を家庭で受けていた涼子は、ひたすら学校で大人に助けを求めているのかもしれない。

その後、涼子は少しずつ心を開いて「ウソ」ではなく本心の言葉で教職員とつながっていきます。私をはじめ、多くの教員が家庭を訪問し涼子の居場所の確保をお願いし、多くの地域の皆さんにも協力していただきました。

涼子は笑顔で信頼できる仲間とともに中学校を卒業し、地元の定時制高校を出て、今は社会人としてきちんと仕事をしていると聞いています。

私が年度途中の人事異動で他の学校に転勤になったとき、涼子は別れ際に「手紙」をくれました。

小さな紙切れには、次の言葉が記されていました。

「なんでいなくなるの。さびしいよ。いろいろありがとう。これからがんばる。私のこと、わすれんでね」（原文のまま）

思春期の子どもが発する表面的な言葉、つまり「ウソ」の言葉でぶつかり、不信を持ち、関係づくりが壊れてしまうことが多くあります。子どもの言葉について、その背景を見ながらしっかり受け止め、内在する本心を発見できる大人であり続けたいと思います。

そのためには、この事例から分かるように、子ども第一主義の守秘義務のなかでつながる大人の信頼関係のネットワークこそが子ども支援のうえで極めて重要で命綱であると言えるのではないのでしょうか。



この社会において子どもたちのカウンセラーは、スクールカウンセラーだけでなく学校教職員もその役目を担っています。特に社会的な弱者である子どもたちが更生を目指すとき、地域社会の中心になるカウンセラー役は、保護司の皆さんに他ならないと思っています。

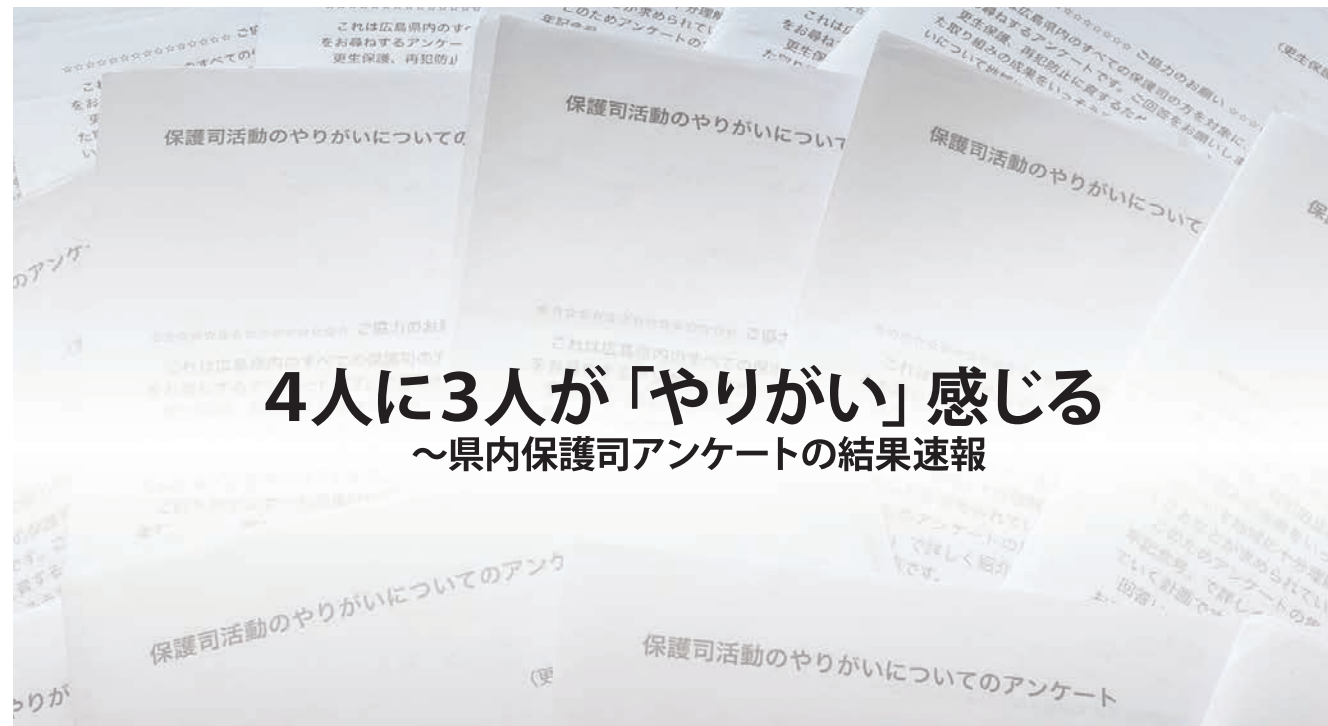
この事例が日ごろから青少年の支援をしてくださっている保護司の皆様、少しなりとも参考になれば幸いです。戦争などの大人の暴力や犯罪が日々報じられている現在です。

保護司の皆様、これからも子どもたちの育成と更生のため、どうかよろしくお願いします。

※掲載写真は本文と関係ありません。

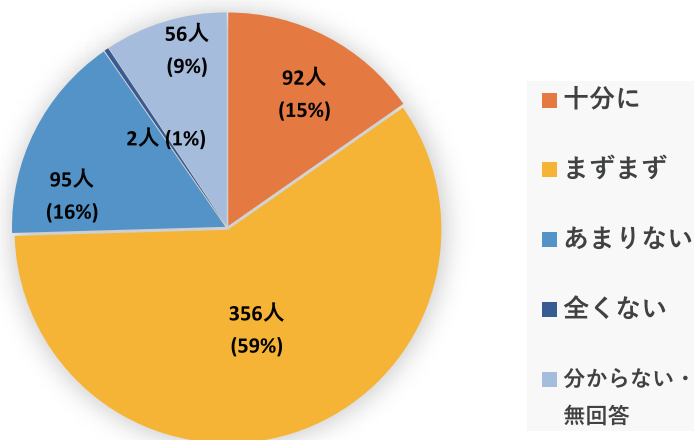
和田晋氏プロフィール

昭和31年島根県出雲市生まれ。昭和57年広島大学大学院学校教育研究科修了。同年から35年間、広島市内公立中学校に勤務。昭和63年から約30年間、広島市内の繁華街を中心に夜回りをし、多くの教職員やボランティアと少年への声かけと支援を行う。平成15年から広島市教育委員会青少年育成部主幹。暴走族対策・少年自立支援担当として、少年の立ち直り支援や居場所づくり活動支援に取り組む。平成29年広島市立二葉中学校長を退任後、広島市教育委員会教育センター主事。比治山大学非常勤講師も務める。平成30年ペスタロッシー教育賞受賞。現在は学校法人広島城北学園広報マネージャー兼学校アドバイザーを務める。広島市西区在住。



4人に3人が「やりがい」感じる ～県内保護司アンケートの結果速報～

やりがいを感じていますか？



「更生保護ひろしま」創刊70周年を記念してこの春、県内の保護司の方々全員を対象に「やりがい」などを尋ねるアンケートを実施しました。おかげさまで約半数にあたる601人から回答をいただき、大変うれしく思っています。ご協力いただいた皆さん、さらに用紙の配布と回収に尽力してくださった各地区会の世話役の皆さん、本当にありがとうございました。

現在、詳細な分析を進めている

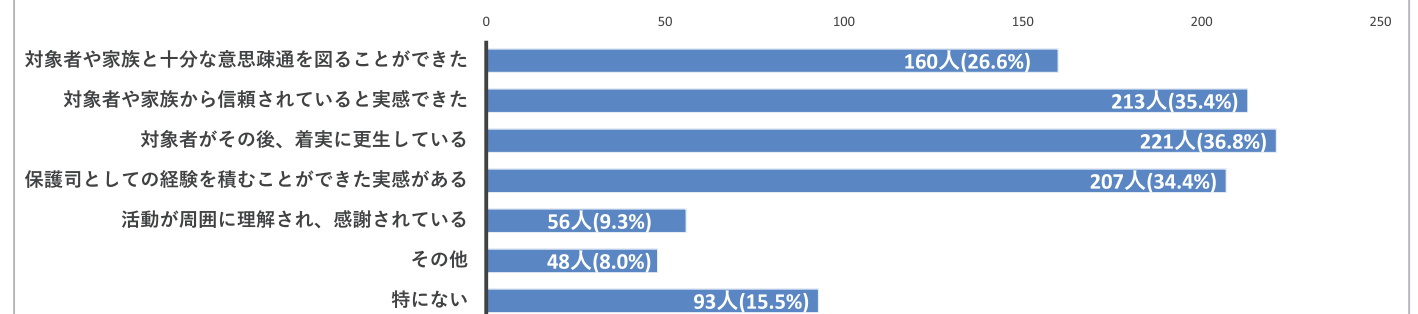
最中ですが、今回は速報として一部の結果をお知らせします。

私たちが最もお聞きしたかった設問は「保護司として、やりがいや手応えを感じていますか？」でした。皆さんの回答は「十分に感じている」92人(15%)、「まずまず」356人(59%)となり、合わせて4人に3人が、やりがいや手応えを感じておられます。

対象者とじっくり対話を重ねながら一人の人間の生き直しを支えていく。保護司のやりがいとはまさに、その難しさの裏返しでもあるのでしょうか。対象者やその家族とのコミュニケーションがうまく運ばなければ落ち込むけれども、次こそはと気を取り直し、うまく運べば頑張った分だけ達成感も大きくなる。そうした日々の奮闘が伝わってくる数字だと感じ入りました。

一方、「あまり感じない」は95人(16%) いらっしゃいました。さらに「全く」が2人(1%)、「分からない」が56人(9%)です。

これまで満足できたことは何ですか？



どうでしょう。少し多いなと思われるかもしれませんが、これも更生支援の難しさを示していると考えられることもできますし、保護司としての経験年数の長短とも関係がありそうです。この辺りはもう少し詳細に分析してみたいと考えています。

その経験年数を5年刻みでみると、「5年未満」が181人(30%)と最も多く、「5年以上10年未満」「10年以上15年未満」と続きます。そして86人

(14%)が「20年以上」のキャリアをお持ちでした。中には昭和の時代に委嘱され、平成、令和と保護司を続けてきた方もいらっしゃいました。

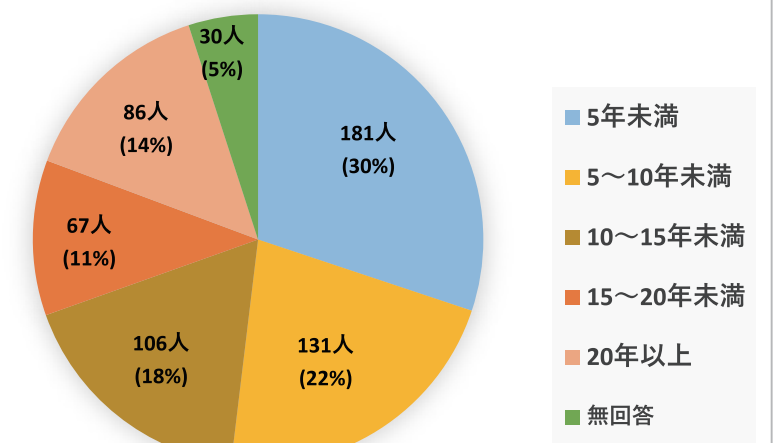
また「これまで満足できたこと」との設問(複数回答)からも、対象者や家族から信頼され、一緒になって着実な更生を目指してきたという皆さんの気概がうかがえます。

なお、グラフを見ていただければすぐに分かりますが、皆さんの年齢は60代と70代がいずれも4割以上です。すなわち、全体の6人に5人は還暦を超えた人生のベテランです。保護司らしい年齢構成と言えるでしょうが、この先のことを考えれば、もう少し若い仲間を増やしたくなります。

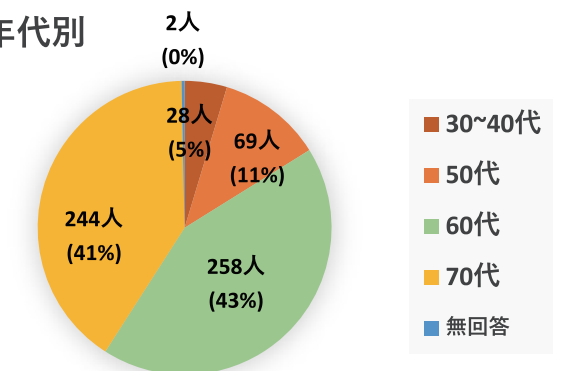
その他の設問も含め、より詳細な回答分析は70周年記念特別号に掲載します。

(「更生保護ひろしま」編集委員会)

経験年数別の人数



年代別



性別

